

日本医家芸術クラブ邦楽部

第五十九回 邦楽祭

邦楽評論家 宮西 芳緒

日本医家芸術クラブ邦楽部《邦楽祭》は平成二十六年十一月二十日(日曜日)、第五十九回を迎えて、例年通り日本橋三越劇場で開催された。この日のために前年の公演から一年間、たゆまず稽古を重ねて来られた先生方の熱の籠った舞台の数々。今回は長唄、謡、端唄、日本舞踊、清元新内小唄から、全十一番が披露された。

まず日本医家芸術クラブ委員長・

太田怜先生が幕前に登場して「開会の辞」を述べる。「我々は邦楽が好きで好きで日々稽古をしています、ただ稽古しているだけではだめで、こうして来ていただいた皆様の前で発表することが上達するためには不可欠です」といった内容を野球にも譬えて話され、「毎年、この三越劇場での公演を目指して一年間、稽古に励んでいますので、芸の方とはともかくとして、その情熱というものを感じて欲しい」と観客に語りかける。そして「武士の潔斎と一緒に、私も今朝は身体を洗って参りましたのでよろしく」と加えて、場内を和ませ

た。



一、長唄『時雨西行』

開幕は山崎律子先生(杵屋勝くに子)こと。皮膚科/台東区)で、日吉

小間蔵師ほかと唄を披露される。杵屋勝国師ほかの三味線、杵屋勝国毅師の上調子。囃子入り。

時雨に遭って乞うた一夜の宿を断られた西行法師は、へ世の中を厭うまでこそ難からぬ 仮の宿りを惜し



む君かな」と詠んで去ろうとする。と、それを呼びとどめ、へ世を厭う

人とし聞けば仮の宿に 心留むなど

思うばかりに」へそれ厭わず此方

へと」と招じ入れた遊女とのやりと

りのうち、西行がその遊女に普賢菩薩の姿を見るところで、「精神性

の高い難しい曲であります、心を

入れて唄い、今年の医家芸術クラブ

《邦楽祭》の幕開きを勤めたいと思

います」と山崎先生。

へ行方定めぬ雲水の」と荘重に出

て、廉々をきちんと抑え、よく通る

しっかりとした綺麗な声で、西行法

師が体験した奇瑞を余すところなく

表現された。杵屋勝国師の三味線が

整った構成で、全体を端正に纏めて

いる。

二、謡（宝生流）『高砂』

平野宏先生（外科／練馬区）は、

佐藤明德氏と連吟。

「この曲は、謡曲中の精華ともい

うべく人口に膾炙した、代表的名曲

であります」と平野先生のコメント

にあるが、実際、後シテの住吉明神

が登場する前の待謡の一節へ高砂や

この浦舟に帆を上げて」は、以前は

結婚式では必ずといっていいほど謡

われ、市井に広く浸透していたもの

だ。「本日は結婚式に謡われる『高砂』

の千秋万歳を、次いでキリの様々の



舞姫のラストまで、連吟させていただきます。」

相生の松に象徴される夫婦和合と長寿のめでたさを讃え、颯爽とした神の祝福の舞を、金屏風を控えて、

一音一音、一語一語を丁寧に、厳かに謡う。まさに当日ご来場のお客さま方へご祝儀的一幕ともいえよう。

三、端唄『仇情八幡祭』並木駒形

《邦楽祭》には今回が二回目の参加となる高橋杏子先生（新水豊伎こと。精神科／台東区）の唄。新水千

豊師の三味線、新水豊富久師の替手。

『仇情八幡祭』は、通称『縮屋新助』

で知られる歌舞伎『八幡祭小望月賑』に拠る。もつとも最近では河竹

黙阿弥の『小望月賑』より、池田大

伍が書き替えた『名月八幡祭』の方

が主流となっている。「ちようど今年六月の歌舞伎座にこの演目がかかり、

その舞台を参考にして稽古に励みました」と高橋先生。



「露は尾花」に重ねて、「散る花」

（芸者・美代吉）の哀れな姿をたっぷりと描き、男女の思いのすれ違い

を切々と唄う。

『並木駒形』はからりと明るく、
山さん谷や堀ぼりからちよいと上がり、「お客だよ」「あいあい」と、「お酒だよ」「あいあい」と、華やかな愛嬌を客席に届ける。

いずれもよく通る艶つややかな声が魅力で、二題の対比も面白い。そういえば前回も芝居ものの『浜町河岸』から一転、『二上り角力甚句』を晴れやかに唄われた。《邦楽祭》の新世代として、次回はどんな趣向で聴かせてくれるか、いまから楽しみである。

四、謡（喜多流）『井筒』

鈴木浩之先生（外科／練馬区）の

謡。

「筒井筒井筒にかけしまろが丈夫お生いいにけらしな妹いも見みざるまに」「比べ来こし振分髪こも肩過かぎぬ 君きみならずして誰たれか上あぐべき」という『伊勢物語』の在原業平きのありのむらたと紀有常娘きよつねのむすめ（井筒の女）の、良く知られた相聞歌が題材となっている。「最も純度高く、幽玄の理念が良く表われた代表作であります」と鈴木先生が述べられているように、静かな展開の中に女の情念を描き切つて、能の人氣曲のひとつに数えられる。

その静けさ、幽玄の世界を表現すべく、真摯に作品に向かい合う鈴木先生の姿が印象に残る。



五、舞踊、長唄『藤娘』

《邦楽祭》には今回が初参加という小島杏里先生（尾上杏里こと。齒科／新潟市）の舞踊。

『藤娘』は、ずっと踊りたいと思
っていた踊りの中の一つですが、や
っと踊る機会を得ることができまし
た。七年ぶりの舞台でどうなるか心
配ですが、精一杯踊りますので楽し
んでいただければと思います」「踊り



の方は、二歳からスタートし、二年
前に師範試験に合格し、現在に至り
ます」と小島先生。初々しく可憐な
舞台姿で、藤音頭も丁寧だった。

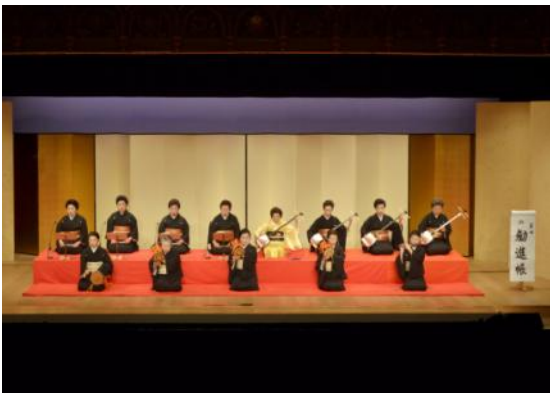
《邦楽祭》の若手としてぜひ次回
も華やかな舞台を見せていただきた
く、これからの《邦楽祭》を担って
欲しい。

六、長唄『勸進帳』

中島信子先生（眼科／中央区）は
東音新井康子師ほかと三味線を披露
上調子は東音岩田喜美子師、唄は東
音小山孝恵師ほか。囃子入り。

「今回は、私の好きな曲の一つ、
歌舞伎でもおなじみの『勸進帳』を

弾きます」と語られる中島先生は、
この曲は既に何度か舞台に掛けられ
ているとのこと、「今回は特に一人弾
きのところがお唄の間と^{*}びつたりは
まり、その情景が、聴いている方に
分かるよう、努力いたしました」と



コメントを寄せられている。

力強い、きっちりした三味線でこの大曲を牽引されている。囃子も含めて総て女流の舞台で、唄との間も快く、囃子との息の合った迫力に客席が包まれた。

ここで休憩を挟んで後半戦に移る。

七、清元『三千歳』

日本医家芸術クラブ委員長の太田 怜先生（循環器科／世田谷区）は、穂坂美和子氏、清元佐季太夫師と浄瑠璃を語る。清元延志佐師の三味線、清元延志佐典師の上調子。

「冴え返る春の寒さに降る雨も



暮れていつしか雪となり」いささか抑えめの出だしながら、優しく、ソフトな肌合いで芝居気分を盛り上げ、「思いがけなく丈賀じょうがに会い」といっ

た台詞など、すっかり直待。三千歳とのやりとりも気持ち良さそうで、「あとにはふたり」〜一日逢わねば千日の「〜いまさら云うて返らぬが」等々、聴いている方も楽しくなる。

「冴え返る」の出だしの重要性を説き、「さりながら、素人の悲しさで、何回稽古をしてもうまく唄えませんが、そこを何とか曲げて、そのつもりで聴いていただければ大変ありがたいと思っっています」と謙遜される太田先生だが、一面の雪景色の中、〜積もる思いぞ残しける」と語り納める、その雪の色が見えるような浄瑠璃だった。

八、端唄「二題」綱は上意『吉野山』

山田新太郎先生（整形外科／練馬区）の唄。伊吹清寿師の三味線、伊吹寿々師の替手。

さぞ芝居がお好きなのだろうと察せられる唄い口で、端唄の二題。『綱は上意』は、主君・源頼光の上意を受けた渡辺綱が羅生門に現われる変化の討伐に赴くという件りが、突如、綱の襟や袖を掴んだのは羅生門河岸の安女郎と碎ける、洒落た一曲。

『吉野山』は『義経千本桜』の一幕で、本性は静御前の持つ初音の鼓に張られた皮（夫婦の狐）の仔という佐藤忠信が、源義経より託された静御前を守護しての道行。「忠信殿、

待ちかねましたわいなあ」「これはこれは静様、女中の足と侮って」……お馴染みの芝居そのままのたっぷりとした台詞のやりとりを、山田先生も存分に楽しんでいらっしやるよう



だ。三味線のリードに委ねて、楽しい一曲。

九、舞踊、長唄『黒髪』

大川尚美先生（尾上菊尚こと。小児科／横浜市）の舞踊。演奏は日吉小八郎師の唄、杵屋栄八郎師の三味線、藤舎推峰師の笛。

黒の着付で、積もると知らで積もる白雪」まで、「地唄風の演出にて大人の雰囲気ですっきりと舞わせていただきます」という舞台で、「難しいことですが、動きの少ない分、より気持ちを入に入れ、女の情念を表現したいと思います」と大川先生は語る。



この日を控えた十月二十日に突き指をしてしまい、全治八週間、左手中指をギプス固定中と聞くが、少しも不自然さを感じさせずに、深い思いを抱いて舞い納められた。

指導は尾上菊紫郎師。演奏の杵屋栄八郎師に大川先生は三味線を師事されていて、「また治ったらお三味線もがんばりたいと思います」とのメッセージも加える。

十、新内小唄二曲『らん蝶』『籠つるべ』

佐々英一先生（ふじ松鶴弥こと。

内科／世田谷区）の唄、二代目家元・

ふじ松加奈子師の三味線。ふじ松美

鶴師の上調子。

「私は、約六年前より新内小唄を習い始め、まだほんのかけ出しですが、家元、師匠のご指導を得てまがりなりに舞台で唄えるようになり

ました」という佐々先生の二題。『らん蝶』は新内の名曲わかぎのあだな『若木仇名草』に拠る。蘭蝶の女房・宮と、遊女・此糸とのやりとり。縁でこそあれ」の一節は、ひとむかし前なら誰もが口ずさんだに違いない。



『籠つるべ』は歌舞伎『籠釣瓶かごつるべ さとのえいざめ

花街酔醒』の佐野の絹商人・次郎左衛門と吉原一の花魁・八ッ橋とのゆくたてを描く。

新内や歌舞伎の人気作を移した曲を（まして「新内小唄」の世界を）樂しまれている佐々先生は、かなりの芝居好きでいらつしやるのだろうと想像しながら聴かせていただいた。

十一、長唄『三曲糸の調べ』

切を勤めるのは前村八重子先生（杵屋和重二こと。小児科／東村山市）。十一代目家元・芳村伊十郎師ほかの唄に、前村先生は杵屋栄敏郎師ほかと三味線を披露する。「今回は新

しくアレンジした笛入り」で、望月太喜輔師の笛が入る。

男性陣に囲まれて紅一点の前村先生は、「敵方に捕われ、思い人の居処をと迫られ、お箏と胡弓とお三味線ですらも知らない悲しみを見事に弾きこなし、疑いを晴らした阿古屋さんの技には及びもせんが、ちょっとでも近づければ幸いと存じます」と語る。阿古屋の弾く三味線はもとより、箏や胡弓の音色まで三味線で弾きこなした上で、こころに曇らない、つまり嘘をついてはいないという阿古屋の真情を表現しなければならぬ難曲中の難曲。

ちょうど数日前に藤間の宗家（八

世藤間勘十郎師）が『三曲糸の調べ』を素踊りで踊られたのを拝見する機会を得、また、いま、でに何度か拝見することの出来た中村歌右衛門丈や坂東玉三郎丈の『阿古屋琴責め』の舞台などが自然と想い出された。



前村先生のこころの籠った演奏は、俗世をつきぬけて清らかな世界を現出されていた。

日本医家芸術クラブ委員長・太田
怜先生が「閉会の辞」で、「毎年毎年、出演者が減り、番数が少なくなつて淋しくなりました」とこぼされながらも、次回はよいよ第六十回。「知り合いの方に宣伝していただくところがたい」と延べられ、六十回記念公演への意欲を秘めていられるのが察せられた。

こうして無事、第五十九回の幕が降りました。

司会は八鍬音羽氏、進行は二村典

子氏。

次回、第六十回記念《邦楽祭》は平成二十七年十一月二十九日（日曜日）、同じくここ日本橋三越劇場で開催の予定。

ご常連の先生方は勿論、今回（あるいはここ数年）休演されていた先生方も、貴重なニューフェイスの先生方も、みなさん揃つて参加されて、盛大な記念公演となることが期待される。

第六十回記念邦楽祭参加者募集

本年11月29日（日曜）に日本橋三越劇場にて行われる邦楽祭への参加者を、あと数名募ります。

邦楽であればジャンルは問いません。地謡、舞踊、長唄、小唄端唄、何でもどうぞ。

時間は5分から30分の間でお願い致します。

参加費は前年参考で10万円から23万円でした。

プロを御呼びびしますので写真、録音、録画などのご注文も可能です。よろしければご連絡下さい。

医家芸術クラブ邦楽部事務局

二村典子

kokkedal@gmail.com

080-5097-0951